

[55] ピナ・バウシュとヴッパタール舞踊団の今

～軽妙で温かみある 澄明の境地に～

2002年6月8日 東京新聞 夕刊

男が女の体の寸法を測る。ありえない動作ではないが、しかし男は執勸に、女のあらゆる部分を測りつづける。そんなところまで？ 何のために？ 冷静に、そして一心不乱に女の寸法を測る男。それを見ている私たち観客の眼に、女の体というものが一種奇妙な代物に見えてくる。とことん物体であって、しかも人の執念の結晶でもあるような…。ピナ・バウシュ演出の『七つの大罪／怖がないで』の中の一シーンである。

あるいはまた、シーツの陰で二人の男が間にいる女にキスしている。少々いかわしいが、平和で幸せな情景だ。と突然、女が叫ぶ。「助けて、助けて！」 隠微な思惑をくつがえされて、観客は思わず笑ってしまう。女は抱えられ、連れ去られながら「みんなが私のこと、いい匂いだって言うのよ」とうれしそうに言いつづける。これは『緑の大地』の中の印象的なシーケンス。

ピナ・バウシュの作品は二時間、三時間の長丁場だが、厳密なストーリーはない。短い演劇的シーンのパッチワークである。それらはごくふつうの日常的な場面から始まるのだが、その何気ない

[55] ピナ・バウシュとヴッパタール舞踊団の今

～軽妙で温かみある 澄明の境地に～

2002年6月8日 東京新聞 夕刊

動作のどこかが、ちょっとおかしい。例えば、いとも優雅にコーヒーに砂糖を入れ、いつまでも入れつづけ、しまいに砂糖の山がカップを覆い尽くしても、まだ入れる。観客はまず気を許し、ついで怪訝に思い、笑ってしまつて、やがて狂気とすれすれの心の地肌に触れてぞっとすることになる。たわいない動作の連鎖が、人の内面をむき出しにし、薄暗い内奥の、それまで気づかずにはいた隠微なよじれまで明るみに出してしまうのだ。

身体表現などという言い方をするけれども、ダンスであれ日常の動作であれ、私たちの「表現」はじつは使い古された約束事で心の中身を包み隠しているにすぎないのかもしれない。怒りとか嬉しさなどといった既成の概念をできるだけ型どおりに装うこと、それを「表現」と呼んでいるのではないだろうか。ピナはその約束事、古い角質のように干からびて心の表皮にへばりついているものを丁寧に、渾身の力で削ぎ落とす。そのようにして、執拗にくりかえされる動作そのものから、傷つきやすく生々しい、時にうっすらと血がにじむ柔肌がむき出しになる。それは見るだけでヒリヒリと胸の痛む体験だ。

[55] ピナ・バウシュとヴッパタール舞踊団の今

～軽妙で温かみある 澄明の境地に～

2002年6月8日 東京新聞 夕刊

ピナが本領の優しさを発揮するのは、その後である。おどましいのにユーモラス、えげつなく、それでいてエレガントな情景を重ね重ねて、観客がもうほとんど音を上げそうになった時、ダンサーたちは陽気なラインダンスで会場全体を祭りに変えてしまう。さんざんに翻弄された観客の心は、もはや無抵抗に身をゆだねるしかない。

今回のヴッパタール・タンツテアター来日公演は、Aプロが彩の国さいたま芸術劇場で上演された初期の傑作『七つの大罪／怖がらないで』（一九七六年初演）。『三文オペラ』と同じブレヒトの詞章とワイルの作曲によるバレエ台本を用いて、蓄財のために「女」を売るポジティブな（！）生き方の、行動と教訓の二面を姉妹の役で表現する。逆説的なテーゼを底力のある歌唱が盛り上げ、特に第二部の、男が少女を追いつめる緊迫感や女装の男性ダンサーを交えたダンスの饗宴は圧巻だ。新宿文化センターでのBプロ『炎のマズルカ』（一九九八年初演）では、黒い岩山の装置が南米の映像に変わり、温暖なラテンの風土のなかで、生命感あふれるダンスに酔いしれた。

[55] ピナ・バウシュとヴッパタール舞踊団の今

～軽妙で温かみある 澄明の境地に～

2002年6月8日 東京新聞 夕刊

同じくCプロ『緑の大地』（二〇〇〇年初演）は
ヴァカンスの保養地を思わせる優雅な雰囲気。色
とりどりのフレアスカートをひるがえして女たち
がワルツを踊り、無邪気であられない水遊びに
興じて男たちと絡み合う。

この三〇年で世界の舞台芸術の頂点に登り詰め
たピナ・バウシュだが、怨念すら感じさせる若い
頃の表現が、年を重ねるにつれて軽妙で温かみの
ある澄明の境地に移ったという印象を受けた。ど
ちらをより評価するか、それは見る人によるので
あろうが。